

シンポジウム「日本、中国の近世、近代における漢字、漢字文化の交流について」

コーディネーター・司会  
パネリスト

文教大学	阿川	修三
筑波大学	小松	建男
二松学舎大学	佐藤	一樹
文教大学	蔣	垂東
文教大学	阿川	修三

日本では、漢字伝来以降、それに音と訓を付し、更にそれから仮名という表音文字を作り出し、漢字を日本語の中に取り込んだ。そして漢文訓読法と言う、簡便な翻訳法を創り出し、それによって中国語文献（漢文）を比較的容易に読むことができるようになった。更に後になって、この漢文訓読から和漢混淆文が誕生し、更に今日の日本語の基本文体である漢字仮名交じり文が生まれるのである。その結果、日本において中国文化の影響は徐々に広がりを見せた。平安時代までの担い手であった貴族から、鎌倉時代以降は武士層にも浸透を始め、その影響力が質的にも深化し、量的にも飛躍的に増大し、庶民層にまで及んだのは近世後期である。その傾向は明治にも、即ち近代にも続いたので

ある。

今回のシンポジウムでは、その漢字、漢字文化の影響が最も広汎化し、深化したと言われる近世、近代（幕末、明治）に絞って、その諸相を、日本、中国の文化交流という視点に立ち報告した。

中国白話小説の研究を長年進めてきた小松建男会員は、江戸時代後期の中国白話小説の受容について報告した。この分野ではたたくさんの研究が積み重ねられ、中国語学習との関係、日本文学への影響について様々なことが明らかに



なっている学界の現状を踏まえ、中国語を学習していない人物が、どのような白話小説に興味を示し、どのようにして読んだのか、テキストはどのようにして入手したのかという点について、主に馬琴が書いた書翰を利用しながら紹介した。

日中近代における新漢語の誕生について研究を

進めてきた阿川は、西洋の制度、概念などの翻訳語に日本でも中国同様に漢語が用いられた事情を先ず説明し、更に従来日本で創られたものと考えられていた翻訳語のかなりものが、中国から伝来した漢訳洋書（キリスト教宣教師によって漢語に訳された西洋の啓蒙書）に源を発するものであることを近年の研究によって紹介した。

日本における漢文学習について研究を進めてきた佐藤一樹会員は、『日本外史』、『十八史略』など、いわゆる歴史読み物などをめぐる明治の人々の回想をいくつか紹介し、ふだんの暮らしのなかで、漢文がどのように位置づけられていたかという、現代にまで至る漢文教育の大枠について、その生成の過程の一端を紹介した。

近世中国の日本語教科書研究を資料にして当時の中国語の音韻の研究を進めてきた蔣垂東会員は、中国最初の日本語教科書『日本館訳語』（一五四九年以前）や同時代時代の『日本考略』（一五三三）、『日本風土記』（一五九二）などの関連文献や、清末の『東語簡要』（一八八四）を資料として当時の日中文化交流を紹介した。

今回のシンポジウムで近世、近代における漢字、漢字文化の日中交流の一端を示すことができたのではなからうか。（阿川修三）

## 江戸時代後期の中国白話小説の受容

小松 建男

曲亭馬琴を白話小説の読者という観点から見てみたい。

江戸時代において、中国への関心は、実用（中国が先進国であり、同時代の制度・文化を取り入れようとする）から、教養（先進国は西洋となり、中国文化が前期の蓄積による教養化）へと変化した。これを象徴的に示すのは『解体新書』の刊行であろう。このような変化につれて、白話小説受容も中国語学習の手段から、それ自体が目的へと変化した。

教養の時代を生きた馬琴は、中国語を解しなかったが、白話小説を読み、自らの小説の資料としている。彼は、中国語を知らずにどのように読めるようになったのか、また小説の入手方法、評価と選択基準はどのようなものであるか。以下、曲亭馬琴が、殿村蓀齋・小津桂窓らに宛てた書翰から探ってみる。

馬琴の学習方法は、先行する翻訳や辞書による独学である。馬琴が独学で白話小説を読みこなせたのは、唐話学の成果が既に一定の蓄積をもっていたことが大きいといえる。

天保三年十二月八日付け小津桂窓宛書翰で白話の参考書として具体的に挙げられているものを見ると、やはり『水滸伝』に関するものが多い。その中でも、陶山南濤の『忠義水滸伝解』およびこれの続編にあたる鳥山石丈『忠義水滸伝抄訳』は「至極よろしきもの」で「俗語の筈蹄これにますものなし」と評価が高い。また『小説奇言』などの和刻三言と『照世盃』も、「小説読み做うにはよし」と評価している。

馬琴の小説入手方法は、購入と借覧がある。購入の場合、書肆を通さず、所有者から直接購入することもある（逆に馬琴が人に直接売った例もある）。借覧は、殿村篠斎・小津桂窓と情報の交換をして、所蔵していない小説があると借りうけている。馬琴は借りた場合、単に閲覧するだけでなく、筆耕に写本を作らせ自己の蔵書としたり、借りた書物に点をつけたり、評論を執筆したりして借覧の礼とすることが多い。

小説に対する評価は、我々とはかなり異なる。「石點頭」・『五鳳吟』を高く評価し、『八洞天』を『拍案驚奇』・『今古奇観』・『覚世名言』より良いと言う。一方、『紅樓夢』は評価が低い。馬琴は、勸懲を重視するので評価が異なると言うこともあるが、時代による好みの変化とその背

景や原因を探ることは興味あるテーマだと思われる。

（筑波大学）

### 「漢文入門」歴史物の学ばれ方

佐藤 一樹

一九世紀後半に成立した、日本語の新しい書き言葉は、「言文一致」という一部のかげ声とはうらはらに、漢文書き下し体がその成立のための不可欠の基盤だったことは、現在までにほぼ明らかとなっている。明治期を通じ、新たに作られた文体が社会に定着していくほど、漢文については、文明開化後の日本において、どのような人がどのように漢文を学んだかを論じた。

まず、漢文を学ぶ場についてだが、維新直後に生まれた田岡嶺雲や山川均らは、小学校とは別に私塾で漢学先生から教わっていたが、明治三二年生まれの松本重治のころになると、中学校が漢文学習の主要な場であったことが見て取れる。二〇世紀の初め、中学校や実業学校といった中等教育機関に進学する男子はすでに二〇万人近くいたが、そのわずか十年後には、進学者は男女あわせて一〇〇万人近

くに達することになる。結果として、江戸時代とは比べものにならないほど多くの若者が、漢文を学ぶことになったのだが、それも近代日本語の書き言葉の基礎が、漢文書き下し体にあつたからである。

近代教育制度の中で漢文が主要なポジションを築いたことについては、中等教育の主要教科となつたことのみならず、その帰結として上級学校の入学試験科目となつたことが、学ぶ側にとっていっそうの重みを有していた。現在と変わらず、出世の階梯へのハードルとしての試験科目となつたことで、受験生のみならず、社会一般から、重要な学習対象であると認識されるからである。

もう一つ、入試に関する情報から、興味深い事実が浮かび上がる。大正年間の高等教育課程の入試で頻出されたのは、上位十位のうち、『論語』、『孟子』を除いては、トッポの『十八史略』をはじめ、『日本外史』、『日本政記』、『史記』など、ほとんどが歴史物だった。漢文体の歴史叙述は、もっぱら事実を記そうとする記事文が中心である。それは、近代日本語の書き言葉が目指した方向と一致しており、ここにも近代漢文学習と、あらたな日本語形成との深い関わりが認められるのである。

(二松学舎大学)

## 明清代における日本語学習書を通してみた中日文化交流

蔣 垂東

明代は、中日関係史上において文化交流の盛んな時代だった。勘合貿易と倭寇はこの時代の二大キーワードで、協調・交流と対立が併存していた。協調・交流の象徴は勘合貿易だったのに対し、倭寇問題は両国の外交関係を緊迫させた最大の要因であった。勘合貿易においては、明にわたつた遣明使が残した渡明記などは、双方の官と民による交流が盛んに行われていた事実を記録している。中国側では遣明使との折衝を担当する通事を養成する目的から、礼部の会同館において中国最初の日本語教科書『日本館訳語』(一五四九年校正)が編纂された。中日語句対訳集形式のこの教科書は、遣明使の構成員、外交上の儀礼用語、貿易商品の名称など勘合貿易関連の実用語句をはじめ延べ五六六項目の日本語を収録し、勘合貿易を媒介とした両国文化交流の一面を伝えている。一方、倭寇問題により中国では日本に対する関心がかつてないほどに高まって、多くの日本研究書が出版されるようになり、最盛期だった嘉靖・万曆年間(一五二二—一六二〇)に刊行されたものだけでも七〇種以上を数えると報告されている。これらの日本研究

書の内容は日本の歴史、地理、社会、風習、文芸などと並んで日本語にも及んでいる。一六世紀に成立した主要なものとして、『日本(国)考略』『日本図纂』『籌海図編』『日本一鑑』『皇明馭倭録』『倭情考略』『日本風土記』『籌海重編』などが知られ、収録されている日本語の語句の数は少ないもので三〇〇余り、多いもので三〇〇〇以上に上る。転載に転載を重ねたものは多く、日本語学習書としての役割も果たしていた。一部の学習書には遣明使の詠んだ真使詩と呼ばれる漢詩も多く見られ、中には明・沐昂の『滄海遺珠』や後の『全明詩』に収録されるものもあり、明代における両国文化交流の実態を知る得難い資料となっている。特筆すべきもの一つには『日本風土記』があり、日本語の語句と日本人の手による漢詩の他に、数十首もの和歌などを中国語訳付で紹介し、中国人の日本の文芸に対する関心の高さを示している。清代に入ってから、日清修好条規(一八七二)の締結により、両国の交流が活発化し、多くの日本人が上海に進出するようになった。日本語のニーズが高まった上海では、『東語簡要』(一八四四)という中国初の中日対訳形式の日本語会話書が誕生した。同書の「火輪船 局器心(じょうきせん)」「東洋車 近而力克殺(じりんきしや)」などの近代語彙が新しい時代の両国の文化

交流の一面を反映している。

(文教大学)

### 日中近代における新漢語の誕生

阿川 修三

日中両国は、十九世紀後半近代化を迫られる中でその一環として、西洋の制度、概念、学術用語などを自国の言葉に翻訳することとなったが、その場合、中国では無論のこと、日本でも、和語では概念を表すことが難しく、言葉としての容量の大きい漢語を用いて翻訳した。これらの訳語を新漢語と言う。新漢語には、例えば「哲学」「経済」「進化」「政治」「社会」などの語があるが、従来その大部分が日本で創られ、中国に伝播し、そこで普及、定着したものと考えられてきた。

この新漢語の中には、中国に明末清初に、更に清末にやって来たキリスト教の宣教師が啓蒙活動の一環として行った翻訳活動の中で作られたものもかなりあることが、最近の研究で明らかになった。例えば、明末清初で作られた訳語には「熱帯」「半島」「幾何」などの地理用語、科学用語があり、清末で作られた訳語には「化学」「地理」などがある。それらの訳語の中には彼ら宣教師たちの著した漢訳洋書を通して、日本に入り普及し定着していき、後に中国

に逆輸出されたものもある。「熱帯」「半島」などがその例である。

更に清末にやって来た宣教師が編纂した英華辞書、例えば、ロプシャイトの『英華字典』などは、日本ではそれを編集・翻訳して、日本における英和辞書の原型とも言える、中村敬字の『英華和訳字典』、井上哲次郎の『訂増英華字典』が刊行された。それに掲載された訳語には日本で普及、定着したものもある。

また、江戸時代に作られた蘭学の訳語は、明治に入り、例えば「舍密」が「化学」に、「植学」が「植物学」に、「消極」が「陰極」に、「積極」が「陽極」に、「越歴」が「電気」に取って替わられるなど、漢訳洋書に掲載された訳語に淘汰されたケースも見受けられる。

新漢語のかなりの部分が、日本人によって作られたものであることは言うまでもない。例えば、「哲学」「形而上学」「進化」などの学術用語は西周、井上哲次郎、加藤弘之等によって作られた。しかし、一方、既に述べたように、キリスト教宣教師の工夫した訳語も、漢訳洋書や『華英字典』を通じて日本に入り普及、定着して、日本人が作った訳語とともに使われた。それらの訳語が、日清戦争後、特に二十世紀初頭、空前の日本語、日本留学ブームで来日し

た多数の中国人留学生によって中国に大量に持ち帰られ、そこで普及、定着していったのである。

このように、新漢語を巡る日中の文化交流はなかなか複雑で、今その点が更に明らかになりつつある。

(文教大学)